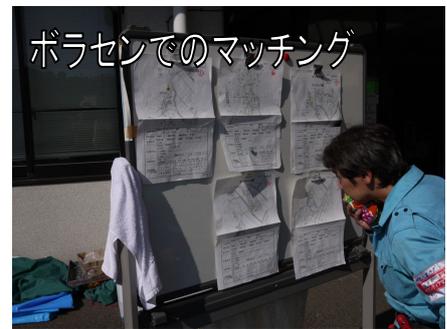


四日市東日本大震災支援の会  
代表 鬼頭浩文

台風12号による水害では、三重県においては、熊野川の氾濫などにより、御浜町・紀宝町で2名の死者と1名の行方不明者が出た。われわれが活動した紀宝町では、1000棟以上が床上浸水の被害を受け、9月災害直後に設立された災害ボランティアセンターを通じ、多くのボランティアが作業をおこなっている。右の写真は、紀宝町高岡の崩れの現場である。休校中の小学校などに土砂が流れ込み、何軒かの家が押しつぶされた状態になっている。



本会では、9月19日の早朝4時に大学を出発し、紀宝町で4名が作業を行った。現地のボランティアセンターは、多くのニーズを残した状態で、朝9時からマッチングが始まった。極めて短時間にスムーズに派遣が決まっていく。100名以上がいると思われるボランティアが約30分で配置が決定されていった。この作業の流れは、東北では考えられないくらいにスムーズなものであった。これは、多くのスタッフと資材に裏付けられたものであると思うが、東北での経験が生かされたものとも考えられる。



われわれが行ったのは、個人宅に積もったドロのかき出し作業である。紀宝町高岡地区は、相野谷川が氾濫し、最大で川幅が数百メートル、川に近いところの家屋は2階建ての屋根まで水に浸かったところである。川からは数百メートル離れた作業現場となったお宅は、写真が示すとおり、身長を超える約2メートル水に浸かったということである。床下は業者がドロかきをするということで、われわれは、納屋や庭のドロを削って運び出す作業を1日かけて行った。搬出路が確保されているため、約50m離れた道路わきまで一輪車で直接ドロを運搬していった。



午後3時に作業を終了し、ボラセンに帰着すると、受け入れ態勢が整っていた。うがいや道具・長靴の洗浄体制も整っており、さらには木本高校の生徒達がボランティアのために炊き出しをしてくれており、おにぎりなどを美味しくいただいた。



われわれは、着替えだけを済ませて、クルマで四日市に向かい、午後8時には大学に到着した。今回の派遣で印象的だったのは、現地の災害ボランティアセンターの運営である。とても安全でスムーズに作業を行う環境が整えられており、着実にニーズが減っていくボラセンの運営は、とても素晴らしいと感じた。

